

状況の現実感尺度の項目改訂

柿本 敏 克

社会心理学研究室

Revising the Sense of Field Reality (SFR) scale items.

Toshikatsu KAKIMOTO

Social Psychology

Abstract

Further to Kakimoto & Hosono (2008), it was attempted to revise the Sense of Field Reality (SFR) scale items (Kakimoto, 2004), especially those of the *Einmaligkeiten* (one-ness) subscale, using a data set derived from a university lecture situation. A questionnaire using the revised scale items was administered to the 67 respondents in a university lecture. Factor analyses revealed that a fairly simple structure corresponding to the three assumed subscales' items was observed. Moreover, Cronbach's coefficients of reliability for three subscales were found all decent. Finally, validity of the scale was examined and confirmed, using respondents' self-reported "seriousness about the situation", hypothesized to relate to the Sense of Field Reality (SFR). Overall, revised version of the scale items seemed fine. Future research would require similar investigation into different types of situations.

KEYWORDS: Sense of Field Reality (SFR) scale, revision of the scale items, improvement of the coefficient of reliability, validity of the scale

問 題

柿本 (2004) は電子コミュニケーション研究と集団間関係研究の接点においてこれまで見過ごされてきた重要な研究テーマとして、「状況のリアリティ」にまつわる問題を指摘した。また詳細は他の文

献に譲るが、近年、集団間関係研究においては、この状況のリアリティの具体的な一側面としての「状況の現実感」について、それが集団間関係の理論的文脈においても重要な概念であることが指摘されている（例えば柿本，2008；柿本・熊谷，2007；柿本・細野，印刷中）。ここで、状況の現実感とは、特定の状況におかれた当事者たちが主観的に感じるリアリティを指す。本稿ではこの状況の現実感を測定するために作成された、状況の現実感尺度（柿本，2004）の尺度項目について、その内容と表現の改善を目指して実施した作業の結果を報告し、最後にこの作業の意義を論じる。

これまでの実証的検討

状況の現実感尺度の開発にあたっては、これまである程度の実証的検討が加えられてきた。まず柿本（2004）における当初の尺度構成にあたっては、アприオリに設定した一回性、主体的関心、自己の現実感、社会的実在性（他者の現実感の認識）の4つの概念類型にもとづき尺度項目を12項目作成し、ある集団場面における54名の回答者から得たデータに基づく探索的因子分析を行った。その結果、4因子構造の解釈を改め、主体的関心、一回性、参加者の現実感の3因子からなると判断し、対応する3つの下位尺度を作成した。柿本（2005）では状況の現実感の場面間比較を行なうことを目指し、仮想世界ゲーム（広瀬，1997）、模擬社会ゲーム（Gamson，1990）、ネットワーク型ロールプレイングゲーム（有馬，2003）および講義場面の4状況を取りあげ、それぞれについて同尺度項目について因子分析を行なった。データ数が少なかったこともあり、予想された3因子構造がすべての場面で見いだされた訳ではないが、暫定的に算出した主体的関心尺度、一回性尺度、参加者の現実感尺度の3下位尺度得点を使うことによって、各場面の特徴をある程度把握できることが明らかとなった。柿本・細野（2008）では、柿本（2005）で問題となった同尺度項目の因子構造が、仮想世界ゲーム場面を用いた4つのデータセットを用いて改めて検討された。データセットごとに多少のずれはみられたが、全体として、想定された3つの下位尺度項目に対応した因子構造がおおむね観測され、さらに性質の共通する3つのデータセットを統合した上での分析結果は、この傾向をより明確にするものであった。ただし、個別データセットを使った因子分析では一回性尺度に対応する項目は2つの因子に分かれることもあり、また個別の項目がデータセットによっては一部別の因子に強く負荷することもみられた。この一回性尺度項目については、柿本・細野（印刷中）で報告された2つの研究のなかでもクロンバツクの信頼性係数がともにかなり低く、尺度項目の改善の必要性が指摘された。

本研究の課題

以上に示したこれまでの実証的検討の結果から、状況の現実感尺度に関して現在課題として残っているのは、一回性尺度項目の内容の改善であると言える。この理由から、本研究では状況の現実感の尺度項目の中でも特に一回性尺度4項目に注目して項目内容とその表現を修正し、探索的因子分析により構造の確認を行った。またそれとともに、尺度の妥当性確認の一環として、状況の現実感と関連が予測される、「状況への取組みに対する真剣さ」との関連を検討した。ある状況に現実感を強くもつような場合には、そうでない場合よりも人はより真剣にその状況に取組もうとすると予想できる。そこで、状況の現実感の尺度得点の大小で回答者を分けた場合、得点大群が小群よりも、より真剣に状

況に取組もうとするだろうと予測した。もしその通りの結果が得られるならば、それはこの尺度が予想通りの概念を測定できているからであると解釈することが可能であろう。

Table 1 状況の現実感尺度項目（改訂版）とその類型¹⁾

項 目 内 容	分類 ⁴⁾
項目1. 私が今 参加している [場面名] は、いつでもやり直しがきくものであると感じる。 ²⁾	一回性(R)
項目2. 私が今 参加している [場面名] に、私はとても注意を引きつけられている。	主体的関心
項目3. 私が今 参加している [場面名] は、今ここにしかないものだと感じる。	一回性
項目4. 私が今 参加している [場面名] に、私は全然関心をもっていない。	主体的関心(R)
項目5. 私が今 参加している [場面名] は、他にはない唯一のものであると感じる。	一回性
項目6. 私が今 参加している [場面名] は、他にも たくさんあるものの一つだと感じる。 ³⁾	一回性(R)
項目7. 今 ここにいる自分は 本当の自分ではないと感じられる。	参加者の現実感(R)
項目8. 自分自身は確かに 今 ここにいると感じられる。	参加者の現実感
項目9. まわりにいる人は、今 参加している [場面名] に、全然関心をもっていないと思う。	主体的関心(R)
項目10. まわりにいる人は、今 参加している [場面名] にとても注意を引きつけられていると思う。	主体的関心
項目11. まわりにいる人は、本当の本人自身ではないと感じられる。	参加者の現実感(R)
項目12. まわりにいる人は、確かに 今 そこにいると感じられる。	参加者の現実感

1) 項目1～6および9, 10の8項目で[場面名]の部分には、測定実施時に具体的な場面の名称を入れて使う。項目の順序は固定的なものではない。

2) 項目1の表現中「いつでも」は、柿本・細野(2008)で報告した通り、2004年版の「簡単に」から変更されたものである。

3) 項目6の表現中「たくさんあるもの一つだ」は、柿本・細野(2008)の報告では「たくさんあるものだ」であったものを今回改訂したものである。

4) 分類は該当する下位尺度に相当する。Rは反転項目を示す。

方 法

状況の現実感尺度の項目内容

状況の現実感とは、前述のように、特定の状況におかれた当事者(たち)が、どの程度その状況にリアリティを感じるのかという主観的感覚をさす。

この尺度はこれも前述のように、主体的関心尺度、一回性尺度、参加者の現実感尺度の3つの下位尺度から構成されると解釈されている。それぞれの内容は柿本・細野(2008)でも述べた通りであり、主体的関心尺度は、対象となる状況に対して当人および周りの人間が自ら興味をもち注意を払っているかに対応する。置かれた状況に関心を払っているほど状況の現実感が大きくなると想定される。また一回性尺度は、対象となる状況の一回性、複製不可能性に対応する。置かれた状況を2度とはない一回限りのものであると認識するほど状況の現実感が大きくなると想定される。最後に参加者の現実感尺度は、対象となる状況にいる人(参加者)自身に対する現実感に対応する。状況の現実感の判断の参照点となる人自体が現実感のあるものと認識されることが、状況そのものの現実感にもつながると想定される。Table 1に尺度項目(改訂版)の内容と3つの下位尺度に対応する分類を示しておく。なお項目1の表現のうち「いつでも」の部分は、柿本・細野(2008)で報告した通り、2004年版の「簡単に」から変更されたものである。また項目6の表現のうち「たくさんあるもの一つだ」は、柿本・細野(2008)の報告では「たくさんあるものだ」であったものを今回変更したものである。いずれも

前述の一回性尺度項目の改善の一環として変更するものである。

場面

今回、状況の現実感を測定する具体的場面としては、筆者が勤務する大学で担当する講義場面を用いた。この講義科目は学部専門科目の一つであり、2年生以上が登録する前期開講選択科目であった。

手続きと参加者

当該講義科目の登録受講生の内訳は2年生46名、3年生35名、4年生17名、交換留学生1名の合計99名であった。2009年7月中旬の講義時間中の終了時刻近くに、筆者の研究に協力してもらいたい旨を述べ、回答を求めるべく回答用紙を配布した。用紙には「この講義についてのアンケート」という題目が付されており、続けて「あなたがこの講義についてどう感じるかを、お尋ねします。以下のそれぞれの意見について、最も適当と思う数字に○印をつけて下さい。1は『全くあてはまらない』を、7は『とてもあてはまる』を指します。」と文中で教示し、その下に記された状況の現実感尺度12項目に対する回答を求めた。授業科目の単位取得との関連については特に説明しなかった。回答者は67名であったが、1名の回答には未記入の項目があったため以下の分析からは除外した。

質問項目

用いられた質問項目は状況の現実感尺度項目に関してはTable 1の通りであり、1.「私が今参加している仮想世界ゲームは、いつでもやり直しがきくものであると感じる。」、2.「私が今参加している仮想世界ゲームに、私はとても注意を引きつけられている。」、7.「今ここにいる自分は本当の自分ではないと感じられる。」(逆転項目)などの12項目であった。また前述のように尺度の妥当性検討のため、この概念と関連が深いことが予想される「状況への取組みに対する真剣さ」の大きさについて、次の項目への回答を求めた。「私は今参加しているこの講義に、かなり真剣に取り組んでいる。」回答選択肢は尺度項目と同様で、1「全くあてはまらない」から7「とてもあてはまる」までの7件法であった。

結果と考察

当初の探索的因子分析

データ欠損ケースを除く66名からの回答に対して主因子法を用いた探索的因子分析を行ない、固有値1以上の基準で4因子が抽出された。4因子による全分散の累積説明率は57.7%であった。Fig.1に初期因子のスクリーンプロットを、Table 2にプロマックス回転後($\kappa=4$)の各項目の、因子負荷量に対応するパターン行列を示す。

第1因子は一回性尺度項目に、第2因子は主体的関心尺度項目にほぼ対応している。第3因子と第4因子は参加者の現実感尺度項目に対応しているが、項目が両因子にまたがっている。

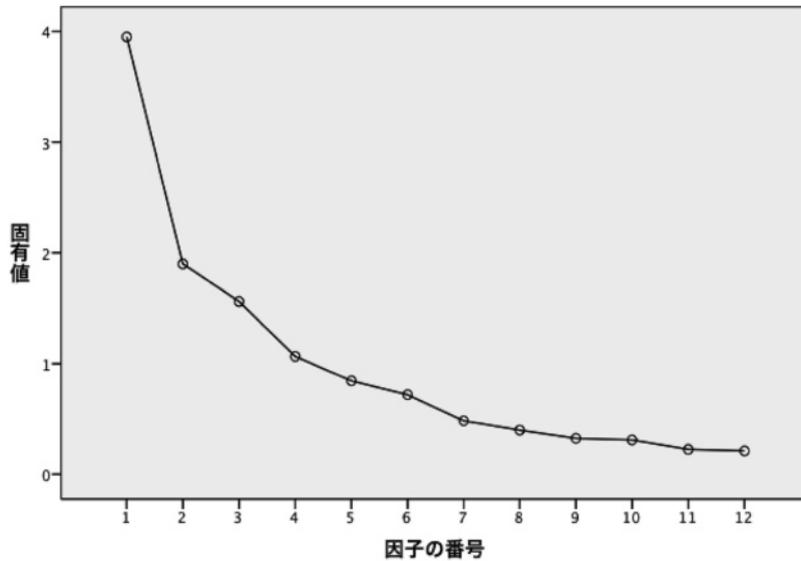


Figure 1 講義場面データの因子分析（主因子法）によるスクリープロット

3 因子解を用いた因子分析

Figure 1 のスクリープロットを見ると、第3因子と第4因子の間で勾配が急になりその後なだらかになることと、柿本 (2004) 以来の3因子による解釈の2つの理由に基づいて改めて3因子解を求め、その3因子に対する各項目の因子負荷量に対応するパターン行列を Table 3 に示した。3因子による全分散の累積説明率は51.3%であった。

Table 2 現実感尺度12項目（改訂版）の抽出された4因子への負荷量

固有値1以上を基準として主因子法により抽出された4因子をプロマックス回転させた後の各項目の因子それぞれに対する負荷量が表示されている。絶対値が0.35以下のものは省略してある。項目1～12はそれぞれTable 1の項目1～12に対応している。

項目（分類）	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
項目3（一回性）	.822			
項目5（一回性）	.770			
項目6 ^R （一回性(R)）	-.713			
項目1 ^R （一回性(R)）	-.538			
項目9 ^R （主體的関心(R)）		.905		
項目10（主體的関心）		-.713		
項目4 ^R （主體的関心(R)）		.477		
項目2（主體的関心）	.404	-.468		
項目8（参加者の現実感）			-.855	
項目7 ^R （参加者の現実感(R)）			.695	
項目12（参加者の現実感）				.707
項目11 ^R （参加者の現実感(R)）				-.466

^R逆転項目

Table 3 3因子解の各因子に対する項目の負荷量

スクリープロットに基づき主因子法による3因子解を求め、プロマックス回転させた後の各項目の因子それぞれに対する負荷量が示されている。絶対値が0.35以下のものは省略してある。項目1～12はそれぞれTable 1の項目1～12に対応している。

項目 (分類)	第1因子	第2因子	第3因子
項目3 (一回性)	.851		
項目5 (一回性)	.782		
項目6 ^R (一回性(R))	-.705		
項目1 ^R (一回性(R))	-.562		
項目2 (主体的関心)	.412	-.381	
項目9 ^R (主体的関心(R))		.942	
項目10 (主体的関心)		-.730	
項目4 ^R (主体的関心(R))		.396	
項目8 (参加者の現実感)			.943
項目7 ^R (参加者の現実感(R))			-.575
項目11 ^R (参加者の現実感(R))			-.474
項目12 (参加者の現実感)	.353		.396

^R逆転項目

これを見ると、概ねいわゆる単純構造となっており、各因子は予想された各下位尺度項目とほぼ対応していると言える。データ上、及びこれまでの研究結果との整合性という両面から考えて、この3因子解による構造の解釈が最も適切であると思われる。

クロンバックの信頼性係数の算出

3因子解では各因子が想定された下位尺度と対応することが確認されたので、各下位尺度を構成する4項目について、尺度の内的整合性を示すクロンバックの信頼性係数 α を求めた。その際、逆転項目のスコアは正項目にあわせた。まず12項目すべてを単一尺度と見なして信頼性係数 α を算出すると.80となり、十分大きな値であった。次に下位尺度について順に、主体的関心尺度、一回性尺度、参加者の現実感尺度の信頼性係数 α を算出すると、それぞれ、.76、.80、.72であり、いずれもまずまずの値であった。これまでの研究では一回性尺度は信頼性係数が相対的に低い傾向にあったが、今回良好な結果が得られたのは、項目内容の改善が奏功したことによるであろう。

下位尺度得点の算出と相互の相関係数

信頼性係数が比較的大きいことから各下位尺度得点および全体尺度得点を算出し、相互の相関係数を計算した。具体的には、まず各下位尺度得点はそれぞれ逆転項目の数値について1を7に、2を6に、3を5にというように反転させて正項目に合わせた上で項目合計点を出した後、各下位尺度の項目数4で除した。各下位尺度の取り得る値は1から7までである。全体尺度得点は3つの下位尺度得点を単純加算して算出した。この得点の取り得る値は3から21までである。全体尺度得点も含めて、尺度間相互のピアソンの相関係数をTable 4に示した。全体尺度と各下位尺度との相関が.70から.79と大きい正の値であるのは当然であるが、下位尺度間にも中程度から弱い正の相関がある。これは、

各下位尺度間に理論的・概念的にゆるやかな関連があることに由来するとも言えるが、一方で、状況の現実感全体尺度にそれぞれの下位尺度が経験的に相関する（従って、現実にある状況の現実感が高いと認識されると、各下位概念も概ね高く認識される）ことからくる再帰的な関係を示すものとも考えられる。

Table 4 状況の現実感尺度の下位尺度間および全体尺度とのピアソン相関係数

	全体尺度	主体的関心尺度	一回性尺度	参加者の現実感尺度
主体的関心尺度	.70**	—	—	—
一回性尺度	.79**	.41**	—	—
参加者の現実感尺度	.72**	.22 ⁺	.31*	—

** 5%水準で有意（両側），* 5%水準で有意（両側），⁺10%水準の有意傾向（両側），*N* = 66.

Table 5 尺度妥当性の検討：「状況への取組みに対する真剣さ」の大きさ

尺度名（得点平均値）	尺度得点大群		尺度得点小群		<i>t</i> 値（自由度）
	平均値（標準偏差）	平均値（標準偏差）	平均値（標準偏差）	平均値（標準偏差）	
全体尺度（12.95） ¹⁾	4.09(1.44)	3.42(1.40)			<i>t</i> (64) = 1.89 ⁺
主体的関心尺度（3.67） ²⁾	4.15(1.20)	3.25(1.62)			<i>t</i> (64) = 2.48*
一回性尺度（4.13） ³⁾	4.18(1.49)	3.36(1.31)			<i>t</i> (64) = 2.36*
参加者の現実感尺度（5.14） ⁴⁾	3.92(1.48)	3.57(1.43)			<i>t</i> (64) = .92, n.s

- 1) 回答者数は得点大群で35名，得点小群で31名であった。
 - 2) 回答者数は得点大群で38名，得点小群で28名であった。
 - 3) 回答者数は得点大群で33名，得点小群で33名であった。
 - 4) 回答者数は得点大群で37名，得点小群で29名であった。
- **p* < .05, ⁺*p* < .10

尺度の妥当性の検討

尺度の妥当性検討のため、問題部分で述べたように状況の現実感概念と関連が深いことが予想される「状況への取組みに対する真剣さ」について、尺度の全体得点および各下位尺度得点との関連を探った。Table 5 に各尺度得点を平均値で分割し、得点の大小群ごとに「状況への取組みに対する真剣さ」の度合の平均値と標準偏差，群ごとの回答者数を示した。予想された差がある場合には，統計値が有意になるはずである。

まず全体尺度については，得点大群で小群よりも「取組みの真剣さ」が大きいという予想された方向での傾向差が見られた。また主体的関心尺度と一回性尺度のそれぞれについても同様に予想された方向で，これらは有意な差が認められた。参加者の現実感尺度については得点の大小で「取組みの真剣さ」に差がなかった。参加者の現実感尺度のみ傾向が違う理由としては，そもそもこの尺度項目への反応自体に天井効果に近いものが現れていることが関係するかも知れない。取りうる値の範囲が1-7のなかで，平均値が5.14というのは，かなりサイズの大きい方に偏った分布であるため，微妙な差が現れにくくなり検出力が弱くなったとも考えられる。さらに今回用いたのが大学での講義場面で

あったため、抽象的概念操作への要求がかなり大きい状況であったのかも知れない。そうした場合に「(状況への) 取組みの真剣さ」が高くなると、そのこと自体が自分や周りの人への注意を相対的に低くさせることになるのかも知れない。この点については今後、別の実証的検討を要する。

要約と展望

講義場面を用いた状況の現実感尺度は、データ上及び先行研究との整合性の両面から見て3因子解で解釈することが妥当であり、想定された3つの下位尺度に対応したものであると判断できた。また各下位尺度とそれを合算した全体尺度のそれぞれで、クロンバックの信頼性係数 α が概ね良好な値を示した。特に一回性尺度の信頼性係数は従来相対的に低かったため今回、尺度項目内容の改善を図ったが、これが奏功したのだとすると、この結果は尺度の「信頼性」の確保に大いに貢献する結果と言える。さらに、下位尺度得点では、相互に想定されたような中程度から弱い正の相関が見られたこと、および関連が予想される「状況への取組みの真剣さ」の度合いとの間にほぼ予想通りの関連が見られたことから、本研究の結果は概ね状況の現実感(改訂版)が、有益な道具になり得ることを示唆すると言える。

冒頭に述べた電子コミュニケーション研究と集団間関係研究の接点における重要な研究テーマを推進する道具として、また集団間関係研究における理論的問題の検討の道具として、状況の現実感尺度の洗練は大いに期待されてきた。本研究が示したように尺度項目改訂版を用いた良好な結果は、この面での大きな前進である。しかし、本研究の限界の一つとして、場面選択の問題がある。柿本(2005)で現実感の場面間比較を行った際には、やはり講義場面から得られた状況の現実感データで、本研究と同様に因子構造の点で比較的良好な結果を示していた。今回の講義場面から得られたデータの分析による、ほぼ予想通りの良好な結果は、「講義場面」という場面の選択が影響している可能性もある。この可能性を検討するために、今後は授業や実習といった大学の公式活動以外の、例えば学生の課外活動などの、あるいは大学そのものを離れた産業場面、余暇活動場面などの他の場面からのデータ収集と分析を試みる必要があるだろう。

付記： 本稿は科研費(21653059)による助成を受けた研究に基づき執筆されたものである。また、研究の実施にあたって学部附属社会情報学研究センターからの機器の提供を受けた。

(原稿提出日 平成21年9月15日)
(修正原稿提出日 平成21年11月18日)

引用文献

- 有馬淑子(編著)(2003). ネットワーク型RPGを使用した社会的共有認知研究 平成13-14年度科学研究費補助金(基盤研究〔C〕〔1〕)研究成果報告書
- Gamson, W.A. (1990). *SIMSOC: Simulated society*. 4th ed. New York: The Free Press.
- 広瀬幸雄(編著)(1997). シミュレーション世界の社会心理学—ゲームで解く葛藤と共存— ナカニシヤ出版

- 柿本敏克 (2004). 電子コミュニケーションと集団間関係, および状況のリアリティについて—状況の現実感尺度構成の試みとともに— 群馬大学社会情報学部研究論集, 11, 215-225.
- 柿本敏克 (2005). 状況の現実感の場面間比較 日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 98-99.
- 柿本敏克 (2008). 社会的アイデンティティ研究から見た自己の社会性 下斗米 淳 (編) 『自己心理学6 社会心理学からのアプローチ』 (金子書房), pp.65-84.
- 柿本敏克・熊谷智博 (2007). 集団とアイデンティティ 潮村公弘・福島 治 (編) 『社会心理学概説』 (北大路書房), pp.122-130.
- 柿本敏克・細野文雄 (2008). 状況の現実感尺度の因子構造について 群馬大学社会情報学部研究論集, 15, 41-51.
- 柿本敏克・細野文雄 (印刷中). 状況の現実感尺度の再検討: 2つの仮想世界ゲーム実験から 実験社会心理学研究